

おおさか

わーど

第  
89  
回

# なにわ情緒ただよう小画集

## ”天下の台所“とは違うロマンチックな響き

春である。恋の季節である。と書くとワザとらしいが、“恋の都大阪”という本をご存じだろうか。堂本印象(1891~1975)が若き日に出版した、今風に言うならばイラスト画集、『いの字絵本 恋の都大阪の巻』のことである。3月にリニューアルオープンした京都府立堂本印象美術館で記念展が開かれるなど、京都を代表する日本画家の印象だが、戦前から大阪とも関係が深い。

室戸台風で倒壊して昭和15(1940)年に再建された四天王寺の五重塔に壁画を描いているし(空襲で惜しくも焼失)、前々回に触れた昭和35(1960)年の輸出繊維会館のモザイク画や、昭和38(1963)年に描いた大阪カテドラル聖マリア大聖堂の祭壇画がある。

これらは画壇の大家となつてからの制作だが、『いの字絵本』は大正元(1912)年に刊行された。印象も若く、弱冠21歳である。竹久夢二の絵本などを意識し、現在もある古書店・杉本梁江堂の創業者、杉本要が出版した。

明治43(1910)年に京都市立美術工芸学校を卒業後、印象は一時、龍村平蔵(1876~1962)の工房で西陣織の図案を制作する。龍村は現在の大阪市中央区博労町に生まれ、府立大阪商業学校(現・大阪市立大学)に学んだ。龍村製織所を設立して西陣織の発展に尽くしたが、船場の商人であり、活動基盤を大阪にも構えている。印象も一時、大阪に住んでいたらしく、芝居や舞踊、祭礼見物のほかモダンな新しい都市文化に触れたらしい。

京都から大阪に移り住んだ少女の回想で、本書は幕を開ける。この回想も、文楽の世話物を意識した印象の創作である。



「私は今日二階に場をとりませう」  
劇場のめだつ二階席に陣取った  
女性。

心中の都、美しい心中の都、私が一つ身の振袖姿だった頃、初めて京から伏見の三十石船でくだりました、母に抱れながら長い長い天の川の流れ入る所が大阪だろうと思つたものです

大阪では、姉さんに連れて行ってもらった道頓堀で、郷土玩具の「がってん首」を見つけ

る。練り物や土製の首を木や竹の串につけた人形のことで、印象は口絵にもそれを描く。少女が三度目に大阪に来たのは、その姉さんが心中した時で、五度目に来た時からそのまま大阪の人となった。

京都へ帰る度にいつも、がってん首と心中とは美しい美しいお土産でした。



「夕陽丘スタイル」  
プランコで遊ぶ深刺した女学生。

と回想は結ばれ、第1図「私は今日二階に場をとりませう」(左下)の、劇場の雰囲気と艶やかな女性の姿で画集の本体は開始される。

イラストのタイトルをあげると、「芝居茶屋まで」「中座の客」「千日まへ」は、道頓堀や南地の花街、芝居町の情趣を醸し出す。「芦辺帰にて」は、南地五花街の芸妓が演舞場で演じた芦辺踊りの帰りだろう。「浪速座の／なにわざの 隣のカフェーに／飼はれたる小鳥こそ／いらつしゃい!」は、浪速座の隣にあった有名なカフェ・パウリスタ。「心さいばし」「大丸で見たひと」や落語に登場する惚れ薬を商う高津の黒焼屋も描かれる。

「南海電車の女」「京阪電車の夜」など近代的なモチーフも多く、プランコで遊ぶ「夕陽丘スタイル」(右上)や、「梅花のひと」「清水谷を出で、三とせのはる」は女学生がテーマである。大阪で体験した青春の様々な思いに文学趣味も加味して大阪の女性が描かれていく。

天下の台所、東洋のマンチェスター、大大阪など、昔からさまざまな異名があるわが街は、商工業都市としてのマッチョなイメージが強調されがちである。しかし、古典芸能も踏まえた“恋の都大阪”というのは、なかなかロマンチックな響きがあって、素敵ではないでしょうか。

### 筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合芸術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像-」(創元社)など。